

南のひと 01

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

加治工トヨさんと出会ったのは、トヨさんの孫を通してだった。孫の名前は富江ちゃん。彼女には双子の姉妹がいて名前は竹美ちゃん。そして彼女の家にはシマという白い犬がいた。
竹美ちゃんの“竹”、富江ちゃんの“富”、と犬の“シマ”で“竹富島”だと初めて聞いた時には、まるで漫画の中の話のようで、思わず声を上げて笑ってしまった。

富江ちゃんのおばあちゃんのトヨさんは可憐で素敵な人だ。

10年ほど前にトヨさんを撮影させてもらった。「帽子はかぶる？ このシャツとスカートで良いかしら？」などとおしゃれに気をつけていたのが印象に残っている。

今年105歳になる彼女を撮影させてもらった。

昨年の夏頃から、トヨさんの撮影をさせてね、と富江ちゃんに声をかけていた。
とても元気で、たまに見かけるとニコニコと笑顔で手を振ってくれた。
なかなか私が撮影に行かずにいたら、夫から「とよさん転んで足を痛めて石垣島の病院に入院したらしいよ」と知らされた。びっくりした私は、次の日に娘をつれて病院へお見舞いに行った。
病室で横になっている彼女に「お見舞いにきましたよ」と声をかけた。彼女は何だか小さく見えて、娘が私の後ろに隠れた途端、少し悲しい気持ちになった。そんな私の動揺を吹き飛ばしてくれるように、彼女はコロコロと笑いながら「よくきてくれたね、ありがとうね」と言って私たちの手を握ってくれた。

色々とおしゃべりをして、最後に「写真を撮らせてもらってもよいですか？」と聞くと、「そこにあるメガネをとってちょうだい、起きましようね」と言ってベッドの背をたててくれた。「無理しないでください、手伝いましょうか？」と言うと、「自分でできる」ときっぱり断られた。午後の光が差し込む部屋で、トヨさんのポートレート撮影させてもらった。

帰り際に、娘と小さくハイタッチをしながら、「偉い人になりなさい」と言っていたのが印象的だった。

南のひと 02

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



初めて実奈さんを撮影したのは、彼女が中学校を卒業し、竹富島を離れて石垣島の高校へ通う事が決まった15歳の春だった。
風になびく夏の制服が日に焼けた実奈さんにとても良く似合っていた。

去年の春、本土の学校へ進学が決まり八重山から旅立って行く18歳の実奈さんを再び撮影した。
「本土に行くの楽しみだね」と言うと、「楽しみなのと、少し不安なのと両方ある」と足で砂をいじりながら話してくれた。

高校生活の事や、家族の事などを笑顔で話す姿は、以前とちっともかわっていなかった。言葉が途切れるほんの少しの合間に見せる表情と仕草から、高校生活3年間で色々な経験をしたであろう私の知らない実奈さんが垣間見えた。

あれから1年と数ヶ月が経ち、先月娘が通う学校に実奈さんが教育実習生として通ってきていた。「久しぶり」と声をかけると一年前の少し不安げな彼女は、もうそこにはいなかった。

「母校での教育実習はどうですか？」と聞くと、満面の笑みと真っ直ぐな眼差しで「楽しいです!」と答えたのが印象的だった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 03

写真・文＝水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



私が中学2年生の岡部壮良くんに会いたいと思ったのは、「たった一人でロケット研究に取り組む少年ー」という出だしから始まる新聞記事を見てからだ。その記事は新聞から切り抜き、机の前のコルクボードにピンで止めていた。新聞社に問い合わせたが、連絡先を聞くことはできず、偶然知人を通して連絡を取ることができたのは、会いたいと思い続けて3ヶ月たった頃だった。

アインシュタインの方程式がプリントされた真っ赤なTシャツと角のある黒縁のメガネは、彼の意志の強さを象徴しているようで、出会った瞬間からその姿に惹きつけられた。

「ロケット開発に興味があるというより、物理学に興味がある」と答えた岡部くんは、小学校を卒業する頃には、中学3年生までの数学検定試験を合格し、現在は琉球大学主催のプロジェクト、琉大ハカセ塾に参加している。当初100名近くが受験して40名程度に絞られたメンバーは、その後2年目で8名にまで絞られ、今後も人数を減らしながら研究を実地していくそう。

「岡部くんは、物理学のどこに惹かれますか？」と聞くと、「身の回りの疑問を身近なものを使い答えを導くことができ、それを実感出来るから」と答えた。彼が質問に答える時の表情は聡明で、13歳の少年は一人で挑戦し続ける事への孤独も、その楽しみも、すべてを自然に受け入れているように見えた。

自宅には岡部くん専用の実験室があるのだと想像していたが、全ての作業はダイニングテーブルで行うそう。お茶をいれてくれたお父さんに、「何事もやろうと思ったら、どこでも出来るという事です」と言うとお父さんが「やるか、やらないか、だけです」と答え、岡部君がそれに静かにうなづいていたのが印象的だった。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 石垣島写真美術館 Miraにて、「南のひと」シリーズより11点の作品を展示中。2019年1月15日まで。
- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 04

写真・文＝水野咲子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を込めて撮影している。



竹富島育ちの小底芽依さんは、高校から八重山を離れて沖縄本島の学校へ進学して行った。時折島へ帰って来ている姿を海辺などで見かけていた。彼女に会えば、「芽依ちゃん元気？ 久しぶり。最近はどうしているの？」などと短い会話を交わしていたので、彼女が高校を卒業した後、上海の大学へ進学して昨年卒業した事は何となく知っていた。

先日、浜で見かけた彼女の背中に太陽のマークが印されているのを見て気になり、撮影させてほしいと声をかけた。

撮影当日、「背中の太陽のマーク似合ってるね」と言ったら、「中心の円の中のマークが、沖縄のマークなの分かりますか？」と言われて初めて気がついた。太陽の真ん中には、沖縄県の県章が印されていた。

この県章は、沖縄県が本土復帰した1972年5月15日から使われている沖縄県のマークで、3つの丸からなっている。一番外側の丸は沖縄県を囲んでいる海、中にある白い丸はローマ字 OKINAWA の『O』と人の輪、一番内側の丸は、発展性を象徴しているそうだ。太陽が『海洋』『平和』『発展』のシンボルを囲む印を背負って立つ彼女に、「芽依ちゃんにとって沖縄とはどういうところですか？」と聞いてみた。彼女はスッと伸びたまっすぐな姿勢で「帰ってくる場所です」と力強く答えた。

芽依さんは、現在関西で就職活動中。中国語を活かせる仕事につきたいと話してくれた。たくさんの経験を積んで、いつか沖縄に帰ってくる日がきたら、再び撮影させてほしいと思っている。

水野咲子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 石垣島写真美術館 Mira にて、「南のひと」シリーズより11点の作品を展示中。2019年1月15日まで。
- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



竹富島、種子取祭で地唄を務める生盛孫賢さんは、石垣島、沖縄本島、東京の仲筋郷友会の芸能に 20 年余りに渡り携わってきた。

宮良元保さんは石垣島仲筋郷友会から狂言を経て長年竹富島に通い、舞踊などの地唄を務めている。

地唄（じうた）とは、舞踊の背景を唄と三線で演出する人をいう。

表からは見えないが、その存在と責任は重大だ。踊り手はその唄と三線に合わせ舞踊る。

幕間には目で語り合い、全身を音に集中させ、ちんだみ（調弦）を行う。その研ぎ澄まされた緊張感ある姿が格好良い。

私がまだ大学を卒業したばかりの頃、舞台セットを造る職人のアシスタントをしながら写真を撮っていた事があった。彼が事あるごとに「ただの良い人には、なるなよ」と言っていた。

以来、ただの良い人ではない人に出会うと心がざわめく。

水野暁子 みずのあきこ

1973 年千葉県に生まれる。1986 年に家族とアメリカへ渡る。1996 年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999 年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

- 石垣島写真美術館 Mira にて、「南のひと」シリーズより 11 点の作品を展示中。2019 年 1 月 15 日まで。
- 島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

南のひと 06

写真・文=水野暁子

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を
込めて撮影している。



中学3年生の内盛正太郎くんは、5年生の頃から小学校を卒業するまでの2年間、毎週土曜日になると英語を学びに私の家に通ってきていた。

休む事なく毎週通ってくる彼の目的は、レッスンの合間に出すオヤツだったのかな?と思ったこともあった。先日「あの頃は、なぜ英語を習いたいと思ったの?」と聞いてみた。「興味があったから。ただ、やってみたいと思った」と素直な口調で答えた。

そんな彼は、今年沖縄タイムス社主催の「ホームステイ海外研修」の企画に応募し、見事八重山から5人の合格者の中のひとりとして選ばれた。この知らせを受けた時には、自分の事のように嬉しくなり「お! すごい。やったね!」と思わず声を出して喜んだ。

正太郎くんは、ひょうひょうとしているイメージがある。その気負わず肩の力が抜けた感じが彼の強みのだろうと思う。ホームステイに飛び立つ前の夏休み始まりの頃に、「面接では緊張しなかった?」と聞くと、「余裕っす、とにかくいっぱい話した!」と少し得意げに答えていた姿が微笑ましく、またそんな彼を誇らしく思った。

先月、正太郎君のシアトルホームステイ体験を綴った文が八重山毎日新聞に掲載された。その中で「僕は将来外国で暮らしたいと思っているので～」と書いていたのが印象的だった。

19年前、ニューヨークから竹富島に移り住んだ私に、「こんな小さな島に移り住んでもったいない」とあたかも世界から取り残される可哀想な人というような言葉を向ける大人がたくさんいた。そんな彼らに、こんな小さな南の島から世界を目指す青年がいる事を知らせたい。そして彼らに「余裕っすよ」とひと言お見舞いしたい。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●石垣島写真美術館 Mira にて、「南のひと」シリーズより11点の作品を展示中。2019年1月15日まで。
●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。